あのナマイキだったお前を、
きっと俺は愛していたんだ。

ぴちゃぴちゅぴちゅ。
狭いカラオケＢＯＸに淫らな水音が響いている。
粘つく唾液が硬い肉を舐める音。
制服姿の少女、アユミが懸命に舌を使っている。
アユミは素直なイイ子だ。俺の感じるトコロをきちんと覚えて丁寧にトレースする。
俺に気持ち良くなってもらおうと真摯に舌を動かす。
「アユミ、いい子だ。凄く気持ちいいぞ」
頭に置いた手で、クシャクシャと黒髪を撫でてやると嬉しそうに微笑んだ。上目遣いに俺を見る目がなんとも可愛らしい。アユミは褒められるのが好きだ。
アユミは口を大きく開けてパクリと含んだ。
舌と口、全体を使って舐めしゃぶる。吐息が熱い。

ぐ、むぅ、ふぅ、はぁ。

存分に舌と口腔で愛撫する。制服まで着て、沈みがちな俺を元気づけようと必死だった。その気持ちが嬉しい。

「ありがとうな、アユミ。元気でたよ」

また上目遣いに覗く瞳が、安心したように緩んだ。

不意に深く吸い込まれた。アユミが喉を許したのだ。

可愛らしい小顔が苦しげに歪む。しかし止まらず、前後に自分から頭を揺する。気持ちのこもったディープスロート。呼吸も困難な姿勢で俺の顔を仰ぎ見る。

痛いほどだった緊張が一気に高まる。俺は放出した。

口で受けた精を、あんぐりと一度こちらに見せてから、ゴクリとアユミは飲み下した。以前教えた通りだった。

御奉仕を完遂して笑顔を浮かべるアユミの頬を、つっと涙が伝った。戸惑うアユミ。それは生意気だった友達『あゆむ』の、せめてもの置き土産のように思えた。

平日のカラオケルームの暇さは耐えがたいものがある。
ひとりバーテン服でスタンバッている俺はバカなのではあるまいか。節電のタメ照明も暗い。
オーナーは税金対策の店だから売り上げは気にするなと言ったきり、サッパリ顔を出さない。こちらも本業再開までのつなぎだからと気楽に構えていたのだが。
古いビルの古い設備の古い店である。あえてこんな店を選ぶ客がいるのだろうか。値段は下げてあるから練習にはいいのかもしれないけど。しかし暇だ。
店内もビルの前も掃除し尽くした。ホコリひとつ無いはずだ。帳簿は間違えるほどの数字がない。

手持ち無沙汰にアクビしていると、客が来た。
なぜかユニフォームを着た少年だった。バスケだろうか。そんな感じの部活帰りか。
通学カバンと部活用か、大きなボストンバッグを抱えている。小柄な少年にはいかにも重そうだった。
「2時間」
ぶっきら棒にそういって奥へ顎をしゃくった。奥の部屋が御所望らしい。
「おひとり様でございますか？」
マニュアルどおりそう尋ねると不快気に眉を寄せた。
「どこに誰がいるんだよ」
部活帰りにみんなでカラオケ、ではないようだ。
ずかずかと奥に歩く少年を、俺はマイクとリモコンのセットを掴んで追いかけた。愛想の悪い客だ。

「もう来なくていいから」
ドアの前で俺からリモコンセットをもぎ取ると、少年はそう言い放った。
「当店はワンドリンク制になっておりまして」
「いらないって言ってんだろッ。前の奴はそうしてた！」
前の奴っていうと、ボヤ出しかけて来なくなった俺の前任者か。そんなのと一緒にされるのは心外だ。
「気が利かないヤツ。はいってくるなよッ」
乱暴に押し入った。開いて閉じたドアがガチャリと鳴った。そう、この店のこの部屋は中からカギが掛かるのである。防犯上、スゲー問題があると思うんだが。
しかしこのコトを知ってる人間はわずかなハズだ。
あの少年はなんの拍子かで知り、それ以来なにか良からぬコトに利用しているらしい。あの年頃が部屋にカギを掛けたら大概そうだ。

酒かタバコか。スマホでエロ動画見ながら自慰、
という線もあるな。まぁ、通る道だ。ほっとけ。
しかしあの子、オトコ、だよな？
なんだかムズムズする。合コンで超好みの女の子に
出くわしたようなドキドキ感が胸にある。
そのケはないハズなんだが。
不機嫌にズカズカ歩くのを追いかけながら、その残り香
にうっとりしてしまった。妙なフェロモンでも出てんだ
ろうか。部活の汗の匂いだろアレ。
まぁ、客だし妙なコトはできない。俺は節度ある大人
なのだ。これでも。
そんなこんなでもう2時間だ。インターホンを鳴らすが
梨のつぶてだ。取りもしない。俺は鍵束を取り出した。
中で鍵を締めてもスタッフには関係ない。ドアを開ける。
お客様は、ラリッておられました。

開けた瞬間、目があったように感じた。合ってない、焦点が虚ろだ。半開きの口から涎を垂らせてぼんやり、顔をこっちの方へ向けているだけだ。
ソファに力なく寝そべる少年に俺は駆け寄った。シャツをめくって胸に手を当てた。心臓の動悸は少し早いだけ。息をついた。危ない状況ではないらしい。
俺の本業は美容師である。仲間にはかなり怪しいヤツも混じっている。その中に自称ドラッグ博士がいる。部屋を見渡す。使いかけの薬の包み紙がある。量は少ない。
過剰摂取が一番コワイ。あいつのアドバイスが役立つ日が来ようとは。
少年はトロンと不思議そうに俺を見ている。

のんきなモンだ。無事だと思ったら腹が立ってきた。少年はいぜん優雅にトリップ中だ。

部屋は妙な空気で満たされていた。少年の体臭と精液の匂い。みればユニフォームの短パンが汁まみれだ。

確認も兼ねて脱がしてみる。抵抗はない。

射精しまくったらしく、可愛らしい性器が液を垂らしている。その下のすぼまりに妙なものが埋まっている。

ゴム製の栓、いやバイブか？　抜いてみた。

「あふっ」

艶っぽい声は無視だ。知ってるぞ。エネなんとかいう大人のおもちゃだ。前立腺を直接刺激するかなり強力なオナニー器具。後で知った話だが、ある種のドラッグはアナルと乳首の性感を劇的に上げるらしい。

そのコンビにドップリはまりこんだ、というワケだ。

可愛い顔してとんだ淫乱小僧だ。ソファも汁まみれで誰が掃除すると思ってんだ。ここはラブホじゃないんだ。

悪態ツキながらも俺の視線は、硬く隆起したピンクの乳首と、広げられたまま物欲しげにヒクつくすぼまりから離れられない。ゴクリ、唾を飲んだのも自分だ。

おかしい。最初見たときから妙だ。俺はコイツに女を感じている。性器丸出しで放心状態のガキが、どうしてこんなに色っぽい？　心臓がドキドキと苦しい。

俺は自分の身体に聞いてみた。硬い。しかも熱い。息をひそめ、身をかがめて少年に触れる。生白い腹。ビクリと震える。熱い。次に乳首。

「あ、やぁ」

女みたいな声がでた。目の焦点は合わないままだ。口に含む。硬くシコッている。女の味がした。

「や、やぁ、ん、ふぅ」

この『イヤ』も女のイヤだ。身を艶めかしくよじる、言葉だけの拒絶。『もっと』とほぼ同義。
俺のほうがオカシクなってきた。身体はとっくに臨戦態勢だ。目の前の女を征服しろと本能が吠える。刺して注いで己の子を産ませろと主張して引かない。
男の子相手に生殖本能がフルスロットルだ。明らかに誤作動している。そんな素養はなかったハズなのに。
全裸で横たわる、あどけない男の子。
俺はバーテン服のボタンに手を掛けた。
だいたい全裸にされて逃げない奴が悪い。男の相手は初めてだがいい経験だ。今まで女どもにやってきたコト、ぜんぶ味あわせてやる。子供できても知んないからな。
ぜんぶ脱ぎ捨てた俺を、虚ろな瞳で少年は見ている。
「今からお前を俺のオンナにしてやる。名前は？」
「……あゆむ…」
「ならアユミだ。俺はアキラ。アユミ、お前のオトコだ」

「……オトコ……オンナ……アユミ…」
カタコトで繰り返す。その腕を取って抱き寄せる。
「そう。俺はお前のオトコ。お前は俺のオンナで
アユミ。だからセックスする」
顔を寄せる。唇を重ねた。無茶な理屈だ。強引にも
ほどがある。だが止まらん。
抱くと粘つくような甘い香りが俺を包む。重ねた口から
更に濃密なそれが流れ込んできた。クラリときた。
アユミは目を開けたままキスを受けている。
「目は閉じろ。そして舌を出せ」
素直に従う。舌と舌とを絡め合わせる。シロップみたく
甘く濃い唾液だった。
二本の舌の水音と、苦しげな吐息が鼓膜をくすぐる。
口を離すと、惜しむようにアユミが息を洩らした。

「いい子だ。アユミ、かわいいぞ」
ソファにそっと横たえる。アユミが男の子だという意識はキレイに消えていた。いま腕の中にいるのは、華奢で小柄でいい匂いのする女の子だった。
アユミもそう扱われることを喜んでいるようだった。横にされても腕を俺の首から離そうとしない。
「かわいい胸だ」
白い胸板のうえにピンクのポッチが二つ並んでいる。口を付けると肩がピクンと震えた。舌を使う。もう片方は指の腹で愛撫する。アユミの息が荒くなった。
「アユミは感じやすいんだな」
意識してアユミと呼びかける。そうする度に、白い肌に赤みが増すように感じた。
ピチャリ、ピチャ、ピチュ。
聞こえるように舌を鳴らす。アユミの吐息が熱くなる。

アユミのすぼまりは、とても熱かった。
そして柔らかい。あゆむが使っていた器具のせいだろうか、指をあてると吸い込むように呑み込んだ。
熟し切った果実だ。中も熟れきっていた。
自分の怒張にローションをよく塗りつける。あゆむのボストンバッグにはいっていたものだ。用意万端だな。
ずっとおとなしかったアユミの男性が、さすがに元気になっていた。懸命に身をもたげて存在を主張している。
よしよし、お前もちゃんと可愛がってやるからな。女のクリトリスと同じ感覚で弄ってやる。
「ふあっ」
アユミが苦しげに呻いた。ここは控えめにしとこう。
どうせなら、俺自身のモノで気持ち良くなってほしいからな。男としてはさ。

怒張をすぼまりに押しあてる。
「アユミ、いくぞ」
一瞬、アユミが微笑んだように見えた。
吸い込まれた。
柔らかい肉に包まれたと感じた途端、俺の分身は
蠢く圧力に締めつけられた。
キツく絞りこみながらオソマシク蠢いている。
うが。
声を洩らしてしまった。なんじゃこりゃ。
「アユミ、お前、凄いぞ」
答えず、俺の首に両手を回す。薄く目を閉じてキスを
せがむ。ご褒美がほしいのか。
「かわいいヤツだよ」
キスしながら褒めると、ソワリと圧が蠢いた。

油断してるとスグにでも持ってかれる。俺は身を引き締めつつ、アユミの胎内を探った。

あっ、はっ、うぐっ、ふっ。

アユミは貪欲だった。どこをつついても快楽を拾いあげる。声を押し殺すような喘ぎがたまらん。

身を捩り、腰を揺らし、俺の背中に爪を立てる。

一点、特に弱いところを見つけた。そこを優しく、逆手に撫で上げると、ひぐっと息を詰まらせる。

「ここか？　アユミ？」

目をつむってコクコクとうなずく。可愛いヤツめ。

しばらくそこを中心に攻め立てる。優しく、執拗に。

そろそろヤマか。アユミと目を合わすと震えながらうなずく。俺は最後のスパートをかけた。

胎内と虚空に、俺たちは同時に精を放った。

それからもアユミは、俺の注ぎこむ全てを余さず受け入れ続けた。

精液も唾液も、激しい突き込みも優しい愛撫も、ありとあらゆる体位も、貪るような口づけも、触れるか触れないかのキスもすべてを受け入れ、そしてそのすべてに激しく反応した。

瞳は虚ろなままだったが、華奢な肢体を小鹿のように反らせ、しならせた。俺の身体に抱きつきながら決して離れず、舌と腰を絡ませて交わり続けた。

アユミの身体も極上だった。未知の肉体としか言い様がない。女では味わえなかった、かといって他の男でもとうてい有りえない香りと感触が俺を狂わせた。

ドラッグに走った理由もわかる。こんなカラダ、持て余しておけるハズがない。肉体こそが麻薬だ。

長い交合を終え、俺とアユミは抱き合ったまま余韻をさまよっていた。
精魂を綻ざらえにしたようなセックスだった。こんなのは生まれて初めてかもしれない。
「アユミ、気持ちよかったか？」
焦点を合わさないままうなずく。
「どれが一番だった？」
「……最初の、キス」
照れる答えだ。俺はアユミの頭をくしゃりと撫でた。
「タオルとってくる」
「アキラ。ありがとう」
「なにがだ」
「ぜんぶ」
また頭を撫でて、俺はドアを開けた。
戻ってきたとき、『あゆむ』がそこに居た。

「な、なんだよこれッ。なんで俺ハダカなんだよッ。なんでお前もハダカなんだよッ。説明しろよ！」

我が人生最高のオンナはどこかに去ってしまったらしい。残念至極。まぁ、また逢う日もあるだろ。

「お客様、落ち着いてください」

業務用の顔で俺は説明した。

時間過ぎても連絡がつかないので鍵を開けたコト。

中で精液まみれのお客様が失神していたコト。

ドラッグと大人のオモチャが原因らしいコト。

応急処置の過程で精液が付いたので脱いだコト。

いま、警察に通報すべきか悩んでいるコト。

モチロン嘘八百である。

しかし『あゆむ』にはよく効いたらしい。特に最後のフレーズで顔色が変わった。よし、こっちのペースだ。

「タオルです。まず身体をよくお拭きください」

通報はしない、そう聞くとあゆむはあからさまにホッとしたようだった。
「その代わりドラッグはやめてください」
「なんでだよッ。関係ないだろ！」
「俺はＮＰＯ青少年薬物防止協会のメンバーなんです」
あゆむはあんぐり口を開けて驚いている。俺も驚きだ。
「通報してから指導するのが本来ですが、特別です。経歴に残りますから。ただし明日から放課後ここに来てください。俺がカウンセリングします」
よくもまぁ、スラスラと言葉が出てくるものだ。
「そんなの、勝手に決めんなよッ」
「無理なら警察に相談した上で正式に対応します。料金は頂きません。あ、それと俺が仕事中はこの部屋を自由に使っていいですよ。薬物以外なら何も言いません」

待ち人は居酒屋に不似合いな格好で席に着いた。
「なんだそりゃ。百メートル自由形か」
「最近ランニングにハマッてんだ。エンドルフィンがこうジュワーっと出てよ。走りながら脳みそお花畑だぜ」
ケッケッケッと怪しく笑うこのナマ白い男は、俺の美容師仲間のひとり、自称『ドラッグ博士』である。
「ほどほどにしとけよ。今日はハカセに相談がある」
「お前がか？　珍しい。聞くぞ」
見かけ行動ともに怪しい奴だが悪人ではない。
「ああ、頼む。今日、こんなコトがあってな」
届いたジョッキを傾けながら、俺は話し始めた。
「……なるほど、お前もうちのメンバーになったか」
俺がカタッたＮＰＯ法人の名前はハカセの作った実在のモノである。こいつは自身がジャンキーの癖に、ネットで薬物防止と依存治療の啓蒙活動なんぞもしている。
「はからずもな。ノウハウを教えてくれ」
「わかった。後でマニュアルをサイトにＵＰしとく」
「助かる」
あゆむの身体はアユミのモノでもある。綺麗にしてやらないと。俺がとっさに嘘をついたのはそんなワケだ。

「最初からそんなにイラついてたのなら禁断症状の疑いもあるな。もしそうならけっこう重症だぞ」
「どうすればいい？　素人にできるのか？」
「とにかく薬を体内に入れないことだ。理想は付きっきりで監視することだな。それができれば素人玄人は関係ない」
高いハードルだ。誰にだって生活がある。ため息がでる。
「それより気になるのはアユミちゃんの方だけどな」
ハカセには洗いざらい話した。いきなり消えたアユミも。
「話のとおりならアユミちゃんはあゆむ君の無意識だ。自意識がぶっ飛んだもんで仮に身体をみてたんだろうな」
ハカセはジャンキーの癖に異様に学がある。
「お前はその無意識に名前を付けて保存しちまった。存在意義まで与えてな。アキラのオンナのアユミ、加えて女としての実体験をみっちり。可哀想な無意識ちゃん」
「マズイのか。アユミになんか悪いコトでも」
「いまの段階じゃ判らんな。ただお前のやったコトは悪徳カルト教団の洗脳に近い。クスリは自前だけどよ」
俺、死刑級の極悪人じゃねぇか。さすがにヘコむ。
「最後のありがとう、てのが救いか。優しくしてやんな」
あたりまえだ。俺からアユミに他の選択肢は無い。

あゆむは翌日もちゃんと来た。警察沙汰もコワイのだろうが、この一室をタダで自由に使っていいと言ったのが効いたらしい。が、さっそく洋酒とタバコを持ち込んでやがる。気にはなったが目を瞑る。約束だからな。

俺は仕事の空いた時間を、なるべくあゆむと過ごすことにした。ハカセによるとクスリにハマるのは例外なく淋しい人間らしい。隙間を恍惚感で埋めるんだそうな。

しかしあゆむはこれを嫌がった。酒とタバコを呑みながら携帯ゲームしてるだけだ。それで気が散ると抜かしやがる。同じ空間に他人がいるのがストレスらしい。

バスケもとっくに幽霊部員で、ユニフォームは学校に持ち込んでも怪しまれない私服として使っているだけなんだそうだ。放課後ここみたいな貸しルームで時間を潰すのがこいつの日課らしい。

確かに淋しい青春だ。もったいない。

カウンセリングする、と大見得きったものの、俺にできるコトはなかった。しつこく誘って一緒にゲームしたぐらいだ。おかげで敬語抜きで話せる位にはなった。しかし最近の携帯ゲームってスゴイね。

そんなある日、あゆむが血相変えて部屋を飛び出してきた。俺は仕事中だった。

「これ、アキラが入れたのかよッ」

手に衣服を掴んでいる。受け取って確かめた。

蒼緑色のワンピース。女物だ。

「バッグにはいってたんだッ。なんの嫌がらせだよ！」

もちろん俺が入れたのではない。では誰か。

アユミだ。

これはアユミのメッセージだ。俺に対する。これを着るべきは恐らくあゆむ。しかし理由は？

これをあゆむに着せたらアユミに変身するとか。違う。そんな簡単な話じゃない。わからん。

とにかくアユミは、俺にこの服をあゆむに着せて欲しいのだ。それは分かる。この仕込みはそれしかない。

「あー、スマン。確かにそりゃ俺のだ。本業の練習に使うつもりで買った。ほら、俺、美容師だから」

苦しい。が、押し通さねば。

「やっぱりそうかよ。なんで俺のバッグなんかに」

「ちょっと手伝ってほしくてな。どうも勘が鈍ってヤバイんだ。そこで練習台になってほしい」

「ヤだよ。髪切るんだろ」

「髪は切らない。ヤバイのはメイクなんだ。免許取り消しになる前に練習したい。頼む、モデルになってくれ。バイト代は払うから。この通りだ」

バイト代プラス俺がカクテルを作る、という条件で折り合いがついた。あゆむが調子に乗っている。

しかしアユミよ。俺はいつかの独立開業の日に備えて日々小銭を貯めてる小市民なんだ。あんまし経費が嵩むとツライんだが。

翌日から俺のメイク練習、という名目のあゆむ女装計画が始動した。といっても難しくはない。俺はプロなのだ。そして素材もいい。

ブーたれながら椅子に座るあゆむの顔にメイクを施す。下地からキチンと塗ってく本格的なモノだ。あゆむの肌はしっとり吸い付くような水分を含んでいて、とても化粧のノリがいい。この肌の味を俺は知っている。

アユミの全身をキスで犯したあの日を思い出す。あいつはそれを仔猫のように身をくねらせて堪能していた。

あゆむは女顔だ。体型も小柄で線が細い。骨っぽい所がなく、身体のラインは柔らかくカーブしている。喉仏もあるか無しかだ。

女装に向いている、というよりすべき素材だった。性別欄に男とあるのが記入ミスと思いたくなる。

もっとも、中身はジャンキーのナマイキ小僧だが。

素材がいいので濃い色は不要だ。顔色を明るくして目元にメリハリを持たせる。眉をくっきり上書きする。

口紅は薄く。清楚さを損なわないように。まつげは保留。もともと長い、十分だ。

用意してきたウィッグを付ける。長いのでヘアバンドで押さえた。抵抗するかと思ったがあゆむは黙って鏡を見ている。

ピアス、髪留め、リボン。過剰気味だが置いてみる。

「よし、美人だ」

呟いた俺になにか口を開いてから、あゆむは目を反らした。頬がほんのり赤い。可愛い、と言われればあゆむはムキになって反抗する。美人と言われて怒る男は意外と少ない。

最後に仕上げにかかる。アユミ推薦のワンピだ。

あゆむにはユニフォームの上だけ脱がせた。下着は、一応用意したが初回ではレベルが高すぎる。ワンピに合わせて選んだブラウスと靴を履かせる。

「完璧だ」

「……」

あゆむは絶句していた。鏡に映る自分自身に見惚れている。

「あゆむ。凄い美人だろ。これがもう一人のお前だよ」

「これ、オレ？」

「そうだ、お前だよ。超美人だろ。お前はな、美人なんだよ」

美人。美しい人。女性に使われることの多い褒め言葉。

男はまず呼ばれない。呼ばれたらどうか。不快か。

否。嬉しい。男も美人と呼ばれたいのだ。本当は。

あゆむは美人と呼ばれるべき男の子だった。

いま、それを知った。生まれてはじめて。

「……あ、あぁッ」

自分の身体を抱きしめて、あゆむが震えあがる。

笑いながら泣いてるような、恍惚の表情。

自分が価値ある人間だと、知ってしまった者の顔だった。

提出用にといって、俺はあゆむの女装姿をデジカメで撮影した。ポーズに注文を付けながらパシャパシャと撮りまくる。

最初は恥ずかしがっていたあゆむも、しだいに注文に応じてポーズを取り始めた。表情がみるみる艶やかになる。美しい自分を、撮影させてやるのが誇らしいようだ。

俺はあゆむを賛美しながらシャッターを切り続けた。

何十枚か撮った頃、俺の携帯が鳴った。メールを見て、俺はオーナーに会う用ができたと告げた。2時間程で戻るから、着替えずに待っててくれと頼む。それと使わなかった衣装を見ておいてくれ、と言い残して俺は部屋をでた。

きっかり2時間で戻ったとき、部屋には鍵が掛かっていた。ノックすると慌ただしい大声が返ってきた。

「遅いんだよ！　着替えてるから絶対に開けるな！」

あゆむが帰宅したのを確かめてから、俺は再び部屋に入った。天井の角、部屋全体を見渡せる角度に小型のカメラが仕掛けてある。今日、あゆむが来る前に俺がこっそり設置したものだ。我ながらうまく隠せた。

途中で抜けたのも嘘だった。斜め向かいの喫茶店で時間を潰した。コーヒー一杯で粘ってスマン。

このカメラには今日の女装イベントの一部始終と、俺のいない空白の2時間が記録されてある。これからそれを確認するのだ。

つまり隠しカメラだが、別に俺はあゆむの弱みを握って、どうこうしようというワケではない。

俺がいないあいだ、あゆむは一人きりだった。しかし厳密にはそうではない。アユミがいた。あゆむの中に。

俺はアユミの意図を知りたいのだ。

昨日、一晩中アユミのことを考えていた。あのワンピに込められた意味をだ。『あゆむに着せろ』そこまでは汲み取れた。俺が着ても気色悪いだけだ。しかしその理由が不明だ。

今日の流れは俺の推論でやった。あゆむはどうも自分に自信が持てないようだった。一人でいたがるのもそのせいだ。あゆむは男の子としてはチビだ。線も細い。女顔で随分からかわれもしたのだろう。イケてない方なのかも。

しかし女子としてはかなりイケている。俺はそれをアユミに教えられた。魔性の肉体と言っていい。ただ、直接それを言っても拒絶されるだけだ。

だから練習会などとゴマカシた。一度取った免許は消えなどしない。あゆむがバカでよかった。

自信の拠り所など、なんでもいいと俺は思う。男が女としての魅力に自信を持ってもなんの問題もない。肝心なのはそこから出てくる行動だ。

だから今回あゆむが自分の美しさに自信を持ったのは大成功だった。埋もれていた魅力に気づいた人間が、前向きに変貌するあの一瞬。美容師冥利に尽きる。

アユミも喜んでくれてるハズだ。自信がつけばクスリなどに頼らない。面白いコトはいくらでもあるからだ。

あゆむが自立するコトはアユミの願いでもある。

と、思う。それをこれから確かめる。今日の流れがアユミの意向通りなら、あゆむの行動に影響を及ぼすハズだ。あいつはあゆむの無意識なのだから。

ケーブルでカメラとカラオケモニタを結ぶ。再生が始まった。メイク、着替え、撮影と早送りして例の2時間にさしかかる。

俺が出て行ったあと、少しあゆむは手持無沙汰にぼんやりしていた。そして鏡に映る自分の姿に改めて気づいたようだ。またその前でポーズを取り始める。

さっきとは違う。いわゆるセクシーポーズだ。髪を掻きあげたり、両腕でありもしない谷間を作ったり、鏡の自分にキスしたり、四つん這いで女豹のポーズをとったりしている。なかなか堂に入っている。

スカートを摘まんで徐々に上にあげていく。うん、よく分かってらっしゃる。しかし上げ切ったところで顔をしかめた。ユニフォームの短パンが出てきたからだ。

少し考えて、俺が置いておいた衣装の残りに手を伸ばす。そこには予備の衣服と下着類がある。

手にとったショーツをあゆむは悩ましげに見ている。
そして意を決すると、スカートを捲りあげた。
短パンを脱ぎ、男物の下着からゆっくりと足を抜いた。
そして小さなショーツにその白い足を入れる。
柔らかそうなヒップがこちらに向いている。薄い布が
それを包み込んで、あゆむは疲れたように息を吐いた。
目がトロけている。一線を越えたらしい。
床に置いたままのブラを一瞥して、背中のジッパーに
手を掛けた。慣れない手つきでワンピ、ブラウスを脱ぐ。
小さなショーツ一枚の美少女が、初めてつけるブラに
悪戦苦闘している。まさにそんな感じだった。
上からブラ、ショーツ、靴下姿の美少女がそこにいた。
靴だけ履いたまま、というのがまた。
俺、完全に覗きオヤジである。

鏡の中で、下着姿の少女が顔を赤らめている。
あゆむは陶然とそれを見つめた。自分自身だ。
あゆむは身を屈め、足を広げた。清楚な美少女があられもなく誘っている。ブカブカのブラ、歪んだショーツのライン。正規のモノではない。逆の素材で無理やり作られた歪んだ模造品。偽物の女。
あゆむは今、偽物の女だった。偽物だが、女だった。
女として、鏡のあゆむを誘っている。腰がもどかしく揺れていた。呆けた口が唾液の糸をひいている。
途方もない色気だ。気づけば呼吸を忘れていた。
生殖を無視した情欲がこれほど脳を侵すとは。録画でよかった。ライブなら部屋に飛び込んで襲いかかってるところだ。いや、このあゆむなら脚を開くかもしれない。
あのナマイキ坊主が恐ろしいまで女と化していた。
素養があったのか。それともアユミの仕業か。

ブラとショーツの隙間に、あゆむは指を忍ばせている。
あのピンクの乳首はコリコリに尖っているハズだ。
ショーツの中は、さらに奥、すぼまりを慰めている。
男性を掴んだりシゴイたりはしていない。
あくまで女として、らしい。
「なんで、なんで、なんで」
潤んだ目で呟く。鏡のあゆむと見つめ合いながら、指を激しく動かす。濡れた音まで聞こえてきそうだ。
顔が切なくて泣きだしそうだ。抱いてやらないのが罪悪のような表情。男を待ってる女の顔。犯してやりたい。
涙さえこぼして、あゆむが待っている。男の躰を。
これは、ハマりすぎなんじゃないのか。我に返った。
俺はアユミの示唆もあってあゆむに女装を勧めた。
向いてると思ったし実際向いていた。しかし色情狂になれと勧めたワケではない。

「ひぃッ、ふッ、お、おぉぁぁあッ」
あゆむの指が止まらない。さらに激しく、強く身体を追い込んでいく。目がおかしい。よだれも垂れっぱなし。
ヤメロ、あゆむ。おかしくなる、死んじまう。
モニタに叫んでも何の意味もなかった。
「い、い、いやぁッ」
最後の言葉は拒絶だった。身体をびくんと大きく反らせて、あゆむは動かなくなった。
「あゆむ、あゆむッ」
俺は立上がった。やはり、なんの意味もなかった。
モニタの時間を見る。俺が出て行って1時間ちょいだ。
俺がノックしたとき、あゆむの返事は元気だった。
帰る足元もしっかりしてた。大丈夫だ。心配いらない。
しかし、なんでココまでやるんだ。何故だよ、あゆむ。
モニタの中の、あゆむが動いた。

背中を見せて倒れていたあゆむが、ゆっくりと立ち上がった。意識を取り戻したらしい。俺は息をつく。乱れていたショーツを直してから、首を回して見渡す。目があった。そのまま、近づいてくる。やばい、カメラが見つかったのか。しかしあゆむはそんな素振りは。

「アキラ」

こちらの目を見据えたまま、あゆむは名を呼んだ。

いや、違う。こいつは。

「アキラはアユミのオトコ。アユミはアキラのオンナ」

アユミだ。とうとうの御登場だ。会いたかったぞ。

「わたしはアユミ。信じて」

ああ、信じるとも。その虚ろな視線。俺のオンナだ。

「アユミはアキラのオンナ。信じて」

抑揚のない声で繰り返す。そして。

「アキラ。あゆむを抱いて」

体験版の内容は

ココまでです。

続きは製品版で

お楽しみ下さい。

御笑覧いただき、

ありがとう

ございました。

あのナマイキだったお前を、

きっと俺は愛していたんだ。

2012年6月13日　初版

著者：Miyafool

Feather　Novels

http://featherblog.feathernovels.fool.jp

Eメール info@feathernovels.fool.jp

イラスト協力

きまぐれアフター様　http://5d.biglobe.ne.jp/

Copyright©2012MiyafoolFeatherNovelsAllRightsReserved

この物語はフィクションです。
実在の職業、団体、国家等には
まったく関係ございません。
なお、ストーリー上、違法行為に
あたる記述の部分もありますが、
当サークルはこれらの行為を
助長する意思は全くありません。
この物語に登場する架空の
キャラクターは全て20歳以上
の設定です。
誤解無きようおねがいします。